

『御国の言葉を経験しよう』 マタイ13:18-23

13:18 そこで、種まきの譬を聞きなさい。

13:19 だれでも御国の言を聞いて悟らないならば、悪い者がきて、その人の心にまかれたものを奪いとって行く。道ばたにまかれたものというのは、そういう人のことである。

13:20 石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。

13:21 その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。

13:22 また、いばらの中にまかれたものとは、御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさぐので、実を結ばなくなる人のことである。

13:23 また、良い地にまかれたものとは、御言を聞いて悟る人のことであって、そういう人が実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである」。

●序論

教会に届けられた一通の封書に、新年のショートメッセージがありました。

やはり心なのです。

心の中にあることが、わたしたちの生活の形となって現れます。あなたの心はひとつの形を持っていて、この一つの形が、あなたという人を作り上げます。ねたみやすい心のかたちを持っている人は、なんでもねたむようになる。人を憎む形を持っているとすぐに憎むようになる。人間というのは、心の思いがそのままさまざまな面に出てしまうものです。

ですから、反対に、（心が）人を祝福するようなかたちを持っている人は祝福することができはすです。

何気なく読んだこの文書ですが、わたしが持つ心のありさまが、この年、何を生み出すだろうかと心探られるものでした。

今日、4種類の地にまかれ種のお話を聞いています。

そこにあるのも、種がまかれた土地の状態が、心のかたちをあらわしています。

そしてこの心のかたちが、まかれた種（つまり言葉）の実りを左右するというのです。

ですから聖書はこう私たちに勧めています。

「油断することなく、あなたの心を守れ、命の泉はこれから流れ出るからである」（箴言4:23）

●本論

I. 聞くところから始めます

今日のたとえ話に出て来る「種まく人」、神さま？それはイエスさま？という風に、わかるでしょう。

その御言葉は、蒔かれることで、いろいろな土地、いろいろな人の心に、ある意味で制限なく、届けられることがわかります。そこに実りが期待されます。

この種に例えられる御言葉を「御国の言葉」とイエスさまは言います

それは、神の国からの招きであり、祝福の言葉です。

もっと具体的にいえば、神さまがわたしたちを愛してくださっているという、その言葉です。わたしの罪を赦し、わたしを救う恵みをあらわす福音の言葉です。

まさにこの恵みの言葉はすべての人に向けて蒔かれています。

だから、この言葉を前に、わたしたちが求められるのは、まず聞くことです。

しかしその聞くこと自体をしない人の心がまず挙げられます。それが道ばたです。

結果、まかれた種は、悪い者が来て奪い取っていきます。

13:19 だれでも御国の言を聞いて悟らないならば、悪い者がきて、その人の心にまかれたものを奪いとって行く。道ばたにまかれたものというのは、そういう人のことである。

かつて、その言葉に込められた愛に気づく心も感謝もなく、無視し、退けていた私の心はさながら道ばたであったと思います。

しかし、ある時その心が、その形を変えられる経験を通して、その言葉に耳を傾け感動し、信じる者とされていった。まさに私のうちに信仰が与えられたのです。

ローマ10:17 したがって、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。

## Ⅱ. 応答すること

13:20 石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。

13:21 その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。

「土の薄い石地」聖書のことばの美しさや知恵、感動を与える響きにを好みますが、それ以上は深入りしない心です。

イエスさまは、「わたしのところにきなさい」と、御自身との関係へ招きます。

「だれでも、かわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」(ヨハネ7:37)

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ11:28)

渴きや重荷は、人がかかえる深いところです。それをイエスさまのもとに持ってくる関係へと招かれている。それに応答する時、

:29 「…そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」という祝福を経験できるのです。

## さてもう一つ

13:22 また、いばらの中にまかれたものとは、御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさぐので、実を結ばなくなる人のことである。

いばら囲まれて、ふさがれてしまう。それが、「御言葉をふさぐ」ということです。

御言葉は聞こえます。わかります。理解もしています。けれども御言葉に応答するのは別の機会に。時間が取れたら。この事が終わったら…という風になります。

しばしば人は、富やこの世の心遣いを御国の御言葉よりも価値あるものとし、大切に、あえて「ふさがれること」を良しとしてしまうのです。

それを自分の心のかたちにして長く過ごしていることで、わたしたちはキリストとつながっている実感がぼんやりし、こんなものだろうと、思っている。それがいつもになってしまいます。霊的不健康な状態…、でも本人にはそれが当たり前となる…。だから聖書はこう語ってくれているのです。

箴言4:20-23

わが子よ、わたしの言葉を心に留め、わたしの語ることに耳を傾けよ。それをあなたの目から離さず、あなたの心のうちに守れ。それはこれを得る者の命であり、またその全身を健やかにするからである。

油断することなく、あなたの心を守れ、命の泉はこれから流れ出るからである。

### Ⅲ. 経験すること

13:23 また、良い地にまかれたものとは、御言を聞いて悟る人のことであって、そういう人が実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである」。

この御言葉を聞いて、富や地位や成功を連想する人もいます。また宣教の成功や教会成長を思う人もいるでしょう。

わたしたちはそんな時聖書とその言葉を、なにか成功のためのハウツー本にしてしまっていないか？と。

ある本にこう記されていました。

「聖書は人生をうまく生きることを教える参考書ではないので、聖書からうまく生きる方法を受け取らないように」と。

そしてこう言うのです。

「受け取るべきものはひとつだけです。聖書は『神さまからのラブレター』とよく言います。つまり聖書は神の愛を語る本であり、うまく生きる方法を教える本ではないということです。

わたしたちはここでも、心のかたちが問われます。

その御言葉を聞くのだけど、自分のやり方や目的の中に取り込んで利用しようとする自分に気づかされるのです。

そうではなくて、ただ耳を傾け、神さまがわたしの心に語る言葉を聴き取って味わい、そのところから神に感謝し、神を愛する者とされていく。

ただ神さまとの愛の関係に、わたしたちは招かれているのです。

それこそ、人の秤で量り切ることのできないほどの安心と喜び。その祝福が「実」であらわされるものでしょう。

さいごに)

聖書の目的は、確かにわたしたちに生き方を教えます。しかしその生きさまの中心はイエス・キリストの中にあり、その外にはありません。

キリストが十字架で命がけでわたしたちに注いでくださった愛の中に生きることを他にしてありません。

キリストに目を定めて、この方との愛の関係の中に、さらに深く、さらにはっきりと入れていただくことです。

わたしたちが目を向け、ちゃんと立つべきところは、キリストを通して神が与えて下さった愛されていることの中です。この御国の言葉を受け取りさとることこそ、わたしたち信仰者の心の形、ありさまなのです。